

# なか

No.152

発行日 平成 29 年 9 月 11 日  
発行 那珂市  
編集 秘書広聴課広報グループ  
〒 311-0192  
茨城県那珂市福田 1819-5  
E-mail hisho-k@city.naka.lg.jp  
U R L http://www.city.naka.lg.jp



## 目次 Contents

水鳥®	…	2
マル福制度について	…	6
人事行政の運営などの状況を公表	…	8
いばラッキーの国体情報 !!	…	10
ゆるキャラ® グランプリ	…	15
まちの話題	…	16
Information	…	18
さわやかさん ほか	…	22

# 水鳥

28

## 「飯田村検地絵図」を楽しむ（後編）

『天保経界飯田村田畠図面』（嘉永元年（1848）、大和田勝則家所蔵）を基本として、江戸時代の飯田村の様子を前編（広報なか6月号掲載）に引き続き紹介していきます。

### ●久福寺と一乗院

この地には初め、法明山毘沙門天院久福寺があった。寺伝によると延暦年間（782〜806）に桓武天皇の勅願により創立され、常陸における真言宗教団の一拠点となった。承安3年（1173）に平重盛の内命により、上総介七郎兵衛景清が奉行となって再興し、常陸大掾氏代々の帰依をうけた。

一乗院は応永3年（1396）、石塚佐久山薬師寺の住職宥尊の弟子宥祖が石沢村（常陸大宮市）に開いた。その後天文19年（1550）ごろ、住職となっていた佐竹氏の一族小田野義正の子、海義が太田の山吹に移

し、佐竹本宗の祈祷寺院の地位を固めた。海義の後は佐竹義盛の子、弘喜が住職となり、一乗院と佐竹氏との関係はますます強くなっていく。

天正18年（1590）、佐竹氏が水戸に進出すると、江戸氏の外護する吉田の天台宗薬王院の住職尊仁は石塚村佐久山に追放された。その跡に一乗院が太田から移され佐竹氏・江戸氏の祈願所となった。

その後の寛永年中（1624〜1644）、内密に天台宗天海僧正の計りにより薬王院は元の寺跡に返ることになり、一乗院は吉田明神向に居住した。そして元禄13年（1700）に水戸藩主光圀によって飯田村の久福寺の寺地に移さ

れ、久福寺は廃された※。

一乗院の本尊は不動明王、什宝に千手観音（厨子入、平景清の守り本尊）や十王堂（本尊地藏菩薩、木造10体）、薬師堂（本尊、行基作菩薩。天正8年（1580）中興建立）、大般若本尊十六善神軸物・写経大般若経典600巻（台町一乗院のとき山野辺源太郎義昭の寄進）もある。

寺伝によれば、桓武天皇の延暦年間に諸国に堂宇を建立させたが、多聞堂はその一つである。承安3年（1173）、平清盛は諸国に役人を派遣して由緒ある堂塔を修理させた

が、この多聞堂の再興のために上総介七兵衛平景清を遣わした。そのとき、清盛の長子、重盛の念持仏であった千手観音と上総真崎から多聞天1体を持参し、秘仏として納めたものである。

※天明6年（1786）に『久福寺修繕金覚』があるので、脇坊として残っていたと思われる



▲『天保経界飯田村田畠図面』より字「中根前」

【景清桜】

多聞堂の前に桜の老木が見える。「景清が多聞堂修理のときに指揮した桜の枝を地に挿したが、それが芽を出し生長して繁茂したのである」と伝えられている。



▲景清桜

【孝子大森幸介翁顕彰碑】

一乗院の大森家墓地に、大森利平の長子与衛門と次男三吉（後幸介）兄弟の供養碑がある。兄弟は、弘化2年（1845）5月に討たれた親の仇、林田政兵衛を追って穴倉（かすみがうら市）で討ち果たした。しかし、その咎により嘉永元年（1848）12月まで水戸赤沼の獄に入牢し、その後袋田村へ追放となっていた。その後許され、安政2年（1855）6月28日付けで帰村、「孝心いよいよ一体、精神抜群」として代々苗字帯刀、麻袴着用が許された。幕末には天狗派として奮闘した。飯田村庄屋を務めた大和田家の文

書には水戸藩の風儀改革により、天保4年（1833）から安政2年までに「孝行、貞節、農業出精」などで表彰された者をまとめた嘉永2年（1849）4月の『農業出精孝行貞節書上』が残っている。病身の夫の看護に8年間、夫の他界後も丹精を続け次男を分家させるなど貞節出精を尽くした「母つる女」（45歳）など対象者が19人もいたことは注目に値する。



▶大森幸介翁顕彰碑

【愛宕神社】

一乗院の境内にある多門堂の南西辰巳に鎮座するのが見える。天明元年（1781）修復の際に銅ぶき屋根とした。神体は將軍地蔵とある。防火神を祀る神社で、正徳5年（1715）の創立。明治維新後の神仏分離により、明治41年（1908）9月16日に筑波神社の境内に遷座し神社と合併した。字中根にある古墳は、円墳で直径17m高さ2・5mであるが、周辺はかなり削平されているので実際はもっと大きい規模であったと思われる。現在



中根古墳

のところは独立墳であったと見なしている。神社の位置はこの古墳、あるいは古墳の上に祀られていたとも考えられる。

●「楯ノ前」（掛札館）

筑波神社の東南に広がる字「楯ノ前」観音堂を含む水系がある。楯ノ前は上田が多く、恵まれた土質の田圃が多い。一乗院に隣接するこの「楯ノ前」の楯は「館」を示すものであり「掛札館」に当たると考えられるが、その由来は定かではない。『一乗院旧記』によると次のようである。

飯田の地に大掾氏が小城を築いた。この小城に、常陸大掾の平国香（大掾氏の姓を名乗る）より5代後の大掾繁幹の三男豊田政幹の嫡子（長男）豊田太郎幹久が、大掾氏の流れである多氣太郎義幹の取り立てにより姓を「掛札」と改め、掛札上総介幹久と号し居住した。多氣太郎義幹は熊野の申し子といわれるほど熊野信仰に篤く、幹久は義幹から熊野権現の神札を受けこれを城に掛け

たことから熊野掛札の姓を起したという。飯田村の熊野権現は、この幹久が勧請したのであるか。掛札幹久の弟忠久は出家して「光久入道」と号し、多門堂（毘沙門堂）の別当となり1つの寺を建立した。これが、後の法満山千手寺一乗院の遠祖となる。

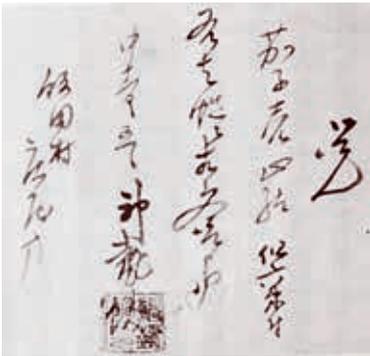
この掛札氏は江戸氏の勢力下にあったが、義尚（高房）の代の天正5年（1577）あるいは天正17年に額田昭通（水戸藩に仕えてからは照通）の攻撃を受けて滅亡した。館跡には土塁と堀の一部が残されており、その一隅に家臣と思われる横山家の墓所がある。『水府志料』には「むかし江戸氏の臣掛札駿河と云もの居住す、後大和田伊賀守貞宗といふ者住す、額田氏のために亡ぶといふ。」とある。



▲掛札館の堀跡

### ●名品「茄子（なす）」

水系の間には字中島、中根、稲荷宮、千貫、向居など畑地が続く。飯田村の記録には、鱒<sup>なす</sup>が金1両に2俵3文の値段で40俵貸し出されていた記録もある。かなり金肥も使われていたようである。水戸藩内の各村から書き上げさせてまとめた『水府志料』の「飯田村」の条には「この村に産する茄子<sup>なす</sup>、府下（水戸城下）に鬻<sup>か</sup>ぐ、近里多くこれを出せどもこの地最佳品なり」とあり、優れた作物であった。万延元年（1860）12月には、飯田村で水戸藩の砲術訓練所であった神勢館に、茄子を6束積んだ馬4匹（4駄）分を納めたとの庄屋宛領収記録「覚<sup>おぼえ</sup>」が、大和田家文書の中にある。飯田村の茄子は藩の御用品でもあった。



▲茄子受け取りの「覚」

### ●新田開発と新田村

小田倉家文書『諸事書留』の「青山氏書附」によると、江戸初期の承応元年（1652）から寛文11年（1671）にかけて、庄屋青山六衛門貞栄が中心となつて進められた「六十原」（上新田・中新田付近）新田開発の姿である。この前後の時期にも新田開発はなされていたようであるが、この地域の新田に入植した農家は100軒余りといわれている。

この新田の中央部を走る街道は直線的であるので、新田開発に伴い新たに整備されたものであろうと思われる。屋敷は短冊形に地割りがなされている。南下して下新田地区に入つて街道は大きく東へ折れた後に、再び

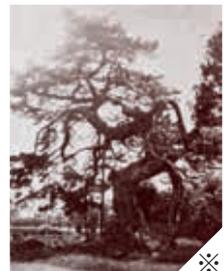


▶『飯田村組分け図』部分

南の水戸城下に向けて直線的に街道が延びる。まさに新たに造成された新田開発による街村である。飯田村124軒のうち、この地域は59軒と全村軒数の約半数を占める。飯田新田の東西の端には細長く林が残る。

上新田西には長谷川友才（友哉）の家が見える。友才は天保6年（1835）に飯富村（水戸市）から引越してきて、地域住民の診療に当たつた。その子は有節といい、同じく医業に従事した。有節の墓は中新田墓地の小林家墓所内にある。また、下新田西に住んだ三極院は、修験・神官として永く農民の教化に当たつていた。

### ●曲松

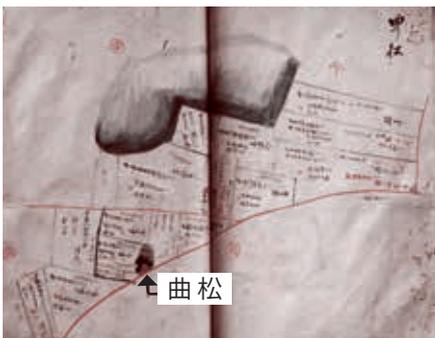


※

一乗院から西南へ参道的に延びる道の先に字「曲松」が見える。これは、源義家の軍勢が後三年の役となる東北遠征に向かう途中に休憩を取つた際のお手植松といわれる（昭和40年代に枯死）。義家伝説は、市内の全域にわたつて数多く残っている。

この曲松から義家の進軍ルートを考えてみると、那珂川西岸の十万原（水戸市・城里町）集結を不動のものとすると、「戸板の渡し」で渡河した後に飯田台地へ上つたか、または那珂川東岸の上河内鎮守素鷲神社境内に、義家が休憩した折りに兜<sup>かぶと</sup>をかけたとされる「兜懸松」があることから、2つのルートで渡河したことも考えられる。しかし、伝説を考証することに無理があるのかもしれない。

※『わが郷土』より  
枯死前の曲松



▲『天保経界飯田村田畠図面』より  
字「曲松」

● 小字名

「字切順番附目録」から飯田村の小字を挙げておこう。現在と比較することも一興です。

打出、東、宿谷津、戸先、新地前、瀬戸洞、西、宮前、中畷、浜射場、引立、楯ノ前、勸恩（観音）堂、田北、下田北、寄居、稲荷宮、寄居南、中根前、中根、久保内、洞下、上加良田、中加良田、下加良田、上沖田、沖田西、中沖田、下沖田、弥惣橋、捍鋪（押敷）、向居、畷ノ内、高野宮、向居西、曲り松、千貫、上飯田、上新田西、上新田東、中新田西、中新田東、下新田西、下新田東、中新田西後、新田西後、中谷原、上飯田原、熊野後



▲『飯田村検地絵図』より「字切順番附目録」

まとめ

この検地絵図を通して飯田村の主な地域を見てきました。飯田村にも多くの先人たちの足跡があります。その心意気を感じて、新たな地域住民の歴史を築き上げたいものです。

『那珂町の近世村絵図』

文中で紹介した絵図は、平成14年に那珂町教育委員会が発刊した『那珂町の近世村絵図』に掲載されたものです。

現在の大字はおおよそ江戸時代の村に当たります。各村では村運営のため、目的に合わせた村絵図が作られました。市内にはこの「水鳥」で紹介した飯田村絵図のほか、各村の村絵図が現存し、庄屋などを務めた家に保管されています。『那珂町の近世村絵図』では、それらを地区ごとにもとめ、掲載しています。

村絵図からは、田畑、水路や山など、当時の土地利用のさまざまな情報を読み取ることが出来ます。古文書になじみのないかたも村絵図を現在と比較しながら読み解くことができます。

▼新刊のお知らせ

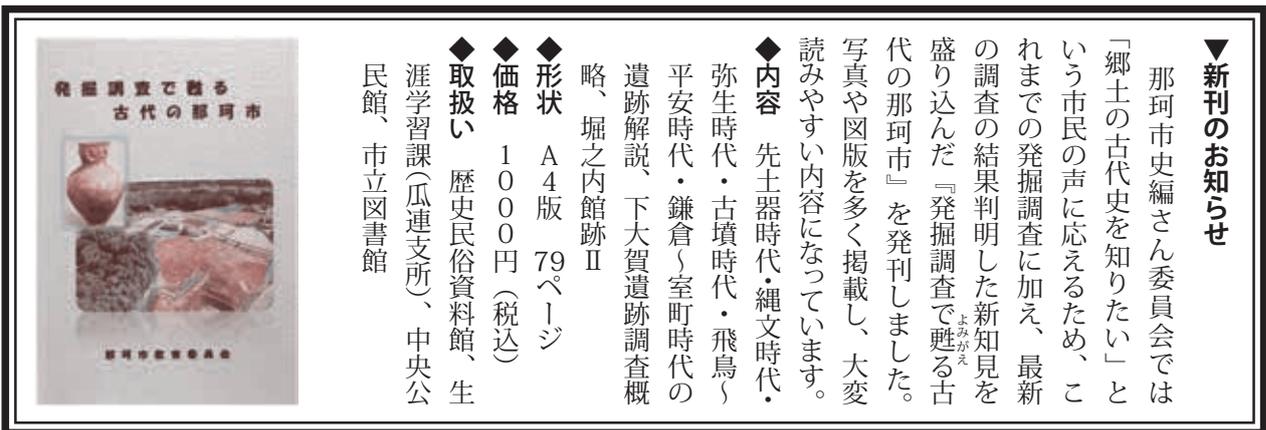
那珂市史編さん委員会では「郷土の古代史を知りたい」という市民の声にこたえるため、これまでの発掘調査に加え、最新の調査の結果判明した新知見を盛り込んだ『発掘調査で甦る古代の那珂市』を発刊しました。写真や図版を多く掲載し、大変読みやすい内容になっています。

◆内容 先土器時代・縄文時代・弥生時代・古墳時代・飛鳥く平安時代・鎌倉く室町時代の遺跡解説、下大賀遺跡調査概略、堀之内館跡Ⅱ

◆形状 A4版 79ページ

◆価格 1000円(税込)

◆取扱い 歴史民俗資料館、生涯学習課(瓜連支所)、中央公民館、市立図書館



問い合わせ

歴史民俗資料館

☎ 297・0080